

モンテーニュ、見上げる目、見下ろす目 (1)¹⁾

奥村 真理子

はじめに

ここに同一人物が記した二組の文章がある。一方には見上げる行為が、他方には見下ろす行為が比喩として用いられている。まずは英雄的な魂を見上げる彼の言葉。

Rampant au limon de la terre, je ne laisse pas de remarquer, jusques dans les nuës, la hauteur inimitable d'aucunes ames heroïques. (I, 37, V. S., p. 229, A)²⁾

次は超越的な思想を近づきたい聳え立つ場所に喩え、見上げて語る言葉。

Ces humeurs transcendentes m'effrayent, comme les lieux hautains et inaccessibles; (III, 13, V. S., p. 1115, C)

一方には賞賛の念がこもっているのに対し、他方には畏怖の気持ちが表明されている。次は見下ろす行為。友情と恋愛を同時に経験していた時のことを彼はこう語る。

la premiere maintenant sa route d'un vol hautain et superbe, et regardant desdainneusement cette cy passer ses pointes bien loing au dessoubs d'elle. (II, 28, V. S., p. 186, A)

見下ろしているのは「友情」であり、見下ろされているのは「恋愛」である。彼の心の中では友情の方が恋愛よりも高い地位を占め、友情が恋愛を「見下ろしていた」というのだ。だが、次の文章では「見下ろす」ことは「見下す」ことどころか、「見上げる」気持ちを表してはいないか。

Regardons à terre les pauvres gens que nous y voyons espondus, la teste penchante apres leur besongne, qui ne sçavent ny Aristote ny Caton, ny exemple, ny precepte: de ceux là tire nature tous les jours des effects de constance et de patience, plus purs et plus roides que ne sont ceux que nous estudions si curieusement en l'escole. (III, 12, V. S., p. 1040, B)

彼とはミシェル・ド・モンテーニュ、上の文章はいずれも『エッセー』中のものである。思想においても多面性をもつ著者であるが、表現においても比喩の豊富さ、その多様性、不定性、多義性が特徴であり、また魅力である。不定性というのは、一続きの文章においてある種の比喩から別種の比喩へと比喩が次々と交替していくことをそう呼んだのであるが³⁾、この二組の文章には、見上げる行為の比喩と見下ろす行為の比喩の多義性もしくは両義性を明白に見取ることができる。『エッセー』におけるイメージを蒐集していたチボーデも、あの未完のリストのなかで、「上方への運動」と「下方への運動」のグループ（そこには「見上げる行為」と「見下ろす行為」も入れられている）に両義性を見出している⁴⁾。また、バラは『エッセー』における低さのイメージの両義性を指摘している⁵⁾。

ところで、「高さ」と「低さ」およびそれに関わる「見ること」、すなわち「見上げること」と「見下ろすこと」の比喩は、モンテーニュが自己の判断力の試しという意味で名付けた『エッセー』という著書のなかで、きわめて重要な役割を担い演じている判断の問題に密接に関わっていると思われる。判断はしばしば価値評価というものに繋がり、価値評価はしばしば「高さ」もしくは「低さ」

で表現される、という一般論以上のものがそこにはあると思われる。しかも、「高さ」も「低さ」も、「見上げること」も「見下ろすこと」も両義的なのである。ここであの有名な歴史上の空間的価値体系の変化のことを思い起こされる読者もいるだろう。すなわち、たとえばパフチーンが示したダンテからラブレレーへの、中世における「垂直空間的な価値体系」からその崩壊と新しい空間と時間の概念への変化を⁶⁾。たしかに、歴史的状況を考慮に入れることは当然必要だが、しかし、歴史的な枠組みのなかにモンテニユを入れようとしても、そこに収まりきらないように思われる。また、歴史的座標軸を考慮に入れるあまりそれに沿った解釈をしようとするれば、多くのものを見落とすことになろう。これらの比喩がいかなる文脈において用いられているか、それらにはモンテニユの思考がどのように関わっているのか、ということをもっと見なければならぬ。

さて、慧眼なる読者はすでにお気づきだろう。冒頭に引用した二組の文章のうち、「見上げる行為」がプラスの意味合いをもち「見下ろす行為」がマイナスの意味合いをもっているのは、いずれもテキストA (1580年版) であり、逆のものはテキストB (1588年版) およびC (1588-1592年の加筆) である。これは私が恣意的に選んだからではない。「見上げること」と「見下ろすこと」の正負それぞれの機能が顕著に現れていると思われる短い文例を探したところ結果的にこうなったのである。だが、たしかにチボーデが「上方への運動」のうちマイナスの側面を見出している文例はすべて第三巻のものである⁷⁾。また、バラは第三巻のほとんどの章の構造を低所のイメージが決定していると述べている⁸⁾。したがって、やはり執筆年代を考慮する必要はあるように思われる。もっとも、ヴィレーが推定した各章の執筆年代ではなく、推定によらぬ年代区分に止めねばなるまい。各章の執筆年代は、ヴィレーのあの該博な知識と膨大な調査をもってしても初版の半分以上の章については執筆時期を明白に示すものが見出されず、前後の章の執筆推定時期や、書き方の特徴や、ストア的傾向か否か等によって推測することしかできなかったのである⁹⁾。それにモンテニユ自身が時期を明言していても、それはその部分とその時期に書かれたとい

うことであって、必ずしもその章全体について言えることではない¹⁰⁾ と考えるのは至極妥当である。したがって、最も明白な区分であるテキストA、B、Cの区分を考慮に入れることにする。そうすることによって、少しでも、著者モンテーニュが一つのエッセーを書いている状況に近い状態で文脈を捉えることができるのではないかと考えるからである。もちろん、たとえばある章のテキストAは、何度かに分けて書いた断片を結合し、それにさらに筆を加えてきたものである可能性はかなり高い。だが、それは少なくとも1580年の出版の段階で著者が一つの章としてまとめたテキストなのである。ただし、テキストAのうち、「レーモン・スポン弁護」の章は別個に考察することにする。文脈を考慮にいれて検討するには、この章はあまりに大きな章であり、多くの人々が言うように特異な章であるからだ¹¹⁾。そうして考察した結果、他と同じ結論が出るのであれば、それはそれで意義があるだろう。

1. 他者と自己の「雲泥の差」を見きわめる「目」

(1) 「雲泥の差」、「目」と「足」

Rampant au limon de la terre je ne laisse pas de remarquer jusques dans les nuës la hauteur d'aucunes ames heroïques. (I, 37, *D. M.*, p. 350; *V. S.*, p. 229)

はじめに例としてあげたこの文章は「小カトーについて」というタイトルの章の一文である（ただし今度は1580年版のテキストなので若干異なり、特に形容詞《inimitable》がない）。この章が単に小カトー（ウティカのカトー）への賛辞を表すものではなく、それ以上に判断の多様性を表すものであるという見解¹²⁾に私も同意見である。だが、小カトーへの賞賛がこのなかで表明されていることは確かである。ここで「地上の泥のなかを這っている」モンテーニュが空高く見上げている英雄の魂たちのなかで、やはり小カトーは筆頭にあげられてしかるべき人物なのである。モンテーニュが、自分の尺度で他者を卑しめ

る解釈をする人々に対して小カトーの弁護を終え、小カトーを讃える五つのラテン語の詩句を引用するまえに《Ce personnage là fut véritablement un patron, que nature choisit pour montrer jusques où l'humaine fermeté et constance pouvoit atteindre》(D. M., p. 352-353; V. S., p. 231)と言うとき、小カトーは、あの「雲居の高み」に達しているのである。ただし、ストア的徳の体现者として古代から名高い小カトーを賞賛しているからとあって、ただちにそれがモンテーニュのストア的徳への志向の証言であるとみなすことが問題なのである。たしかに人が誰かを賞賛するとき、賞賛する対象を、自分もそうなりたと思って目指していることはある。だが、この章でのモンテーニュの言葉に、そのような賞賛に結びついた「上昇志向」を読み取ることはできない。

章の冒頭から、モンテーニュが自己と異なる他者と自己とを区別し、それを強調していることは明白だ。

Je n'ay point cette erreur commune de juger d'autrui selon moy, et de rapporter la condition des autres hommes à la mienne. Je croy aysément d'autrui beaucoup de choses, où mes forces ne peuvent atteindre. La foiblesse que je sens en moy, n'altère aucunement les opinions que je dois avoir de la vertu et valeur de ceux qui le meritent. (D. M., p. 350; V. S., p. 229)

この直後に、はじめに引用した「見上げる」行為を表す文章が続くのである。形容詞《inimitable》は1588年以後に加えられたのであったが、「真似ができない」という認識はここですでに表明されている(《où mes forces ne peuvent atteindre》、《La foiblesse que je sens en moy》)。この他者と自己の違いの認識を、あの文章が「高さ」と「低さ」、雲と泥のコントラストでもって鮮やかに描くのである。これに続く文章は、「上昇志向」をではなく、自分とはまさしく「雲泥の差」の、自分には到達できない高みに達している対象を認識できるという判断力を、明確に言い表す。

C'est beaucoup pour moy d'avoir le jugement réglé, si les deffautz ne le peuvent estre, et maintenir au moins cette maistrresse partie exempte de la corruption et debauche. C'est quelque chose d'avoir la volonté bonne, quand les jambes me faillent. (*ibid.*; V.S., pp. 229-230)

すでに記されていた《juger》、《remerquer》、《forces》、《rampant》とともに、「雲泥の差」の認識は、「視力=認識し判断する能力」と「脚力=実行する能力」という対照を形成するのである。この章のなかで視力の比喻は、徳の觀念さえ欠いた時代、人々が優れた他者の行為に対して卑しい解釈をすることへの言及に続いてその原因が語られるとき、再び登場する。悪意、自分の尺度によってしか考えられないという欠陥、という原因のつぎに、モンテニユはより妥当と考えられる原因として、「視力の不足」を提示する。

soit, comme je pense plustost, pour n'avoir pas la veüe assez forte et assez nette pour imaginer et concevoir la splendeur de la vertu en sa pureté naifve (*D. M.*, p. 352; *V. S.*, p. 231)

「視力」は、ここでも認識し判断する能力、あるいは判断に必要な認識をする能力を表すものとして機能しているのである。私は今、曖昧な言い換えをせざるをえなかった。モンテニユは「雲泥の差」を語るときも「視力の不足」を語るときも、比喻に訴えている。これらは認識力だけを表しているのではなく、判断と密接に関わる能力を言い表していると思われる。だが、はっきりと言えることは、それが明らかに「実行する能力」と区別され、「見上げる」対象をモンテニユがその「目」によって認めることができるということに満足しており、そこに自分も達しようなどとは思ってもよらない、むしろそれができないことを判断できる「視力」に自負心さえ抱いているようだというのである。

この「小カトーについて」の章におけるように「見上げる目」の比喻は、他のところでも、モンテニユが実行力に欠ける自己の認識と、自己よりはるか

上方に位置する優れた他者との差を語るときに現れ、同じく「自分には到達できない」ほど優れた他者への賞賛の念を表す。「セネカとプルタルコス弁護」の章 (II, 32) は、不当な解釈をされた優れた他者を弁護するというモチーフにおいても「小カトーについて」の章と類似するが、それ以上にそのなかの一節は、他者の行為に対する判断という内容とその表現において類似している。少なくともヴィレー＝ソーニエ版でテキストAとされた一節を読むかぎり、どうやらモンテニューの思考においてこのモチーフは「目」と、そして「足」と直結しているようだ、と考えられる。だが、1580年版 (D. M.) およびポルドー本の写真複製版¹³⁾を参照すると、ヴィレー＝ソーニエ版にはAとして表記されているテキストCがあることがわかる。以下にその一節を引用するが、左側はテキストA、右側はテキストC、→は下線を引いたテキストAの部文の書き換え、←はテキストAの*の箇所への挿入を示す。→と←の右肩につけた数字はこの箇所における加筆の通し番号である。なお、ヴィレー＝ソーニエ版でテキストCとして表記されているものにもみ (C) の記号をつけておく。

C'est aussi une grand'faute, et en →¹ et est

laquelle toutefois la plus part des

hommes tombent * de faire dif- ←² (C) (ce que je ne dis pas pour
 difficulté de croire d'autrui ce que Bodin)

nous ne sçaurions faire.*

→³ 'eux ne sçauroient

←⁴ (C) Ou ne voudroient. Il semble
 à chascun que la maistresse forme
 de nature est en luy; touche et rap-
 porte à celle là toutes les autres
 formes. Les allures qui ne se
 reglent aux siennes, sont faines et
 artificielles. Quelle bestiale stupidité!

Moy je considere aucunes de →⁵ aucuns hommes fort loing au-
ces ames anciennes eslevées jus- dessus de moy: noméement entre
ques au ciel au pris de la mienne: les anciens:
 et encores que je recognoisse claire-
 ment mon impuissance à les
 suyvre *, je ne laisse pas de * ←⁶ de mes pas ←⁷ les suyvre à veue et
 juger les ressorts qui les haussent
 ainsi et eslevent. J'admire leur →⁸ (C), desquels j'apperçoy aucune-
 grandeur: et ces esclancemans que ment en moy les semences: comme
 je trouve tres beaux, je les em- je fay aussi de l'extreme bassesse
 brasse: et si mes forces n'y vont, des esprits, qui ne m'estonne et
 au moins mon jugement s'y appli- que je ne mescroy non plus. Je
 que tres volontiers. voy bien le tour que celles là se
 donnent pour se monter; et

(D. M., pp. 540-541; V. S., p. 725)

まず、《aucunes de ces ames anciennes eslevées jusques au ciel au pris de la mienne:》が《aucuns hommes fort loing au-dessus de moy: noméement entre les anciens:》に換えられていることについては、偉大な古代の魂を自分よりもはるか高い位置に捉えているということにおいて同様である（だが《eslevées jusques au ciel》というイメージが取り除かれていることについては後で考察することになるだろう）。また、加筆8における《l'extreme bassesse des esprits》に関する言及も、《Je voy bien le tour que celles là se donnent pour se monter》も、高低の比喩を用いている点でテキストAにおけるイメージを踏襲していると言えよう。注目すべきは、《mon impuissance a les suyvre》の後の加筆6《de mes pas》と、《je ne laisse pas de》と《juger les ressorts qui les haussent ainsi》の間の加筆7《les suyvre à veue et》である。つまり、この一節において、テキストAで提示されていた「判断 (juge-

ment)」対「実行力 (forces)」という対比に、「目 (veue)」と「足 (pas)」の対比が対をなしたのは、1588年以後だということである。

「わたしは追加はするが訂正はしない」とモンテーニュは語っている (III, 9, V. S., p. 963, B)。少なくともこの一節に関するかぎり、その言葉どおりだ。高低の比喩による優劣の対比と判断と実行の対比は訂正されていないが、この箇所元のテキストにはなかった目と足の対比が追加されている。したがって、高低の比喩によって他者と自己の差を表すこと、および、足の比喩が実行を、目の比喩が判断を表すということ、これらがテキストAの時期のみならずテキストCの時期までモンテーニュの思考において緊密に結びついていたのではないか。

(2) ヴァリエーション：「霞む目」、「雲泥の差」の地上化

しかしながら、緊密に結びついた要素からなる比喩のパターンを『エッセー』のなかに見出すことはできても、それをワン・パターンに固定することができるのだろうか。これまで読んできた「小カトーについて」および「セネカとブルタルコス弁護」のなかの文章と同様、自分よりはるかに優れた他者の認識を「目」の比喩で表現している他の例を見よう。

以下に引用する文章は、「自惚れについて」の章で、モンテーニュが精神の所産（文章と詩）についていかに自分が無能であるかを語るくだりである。叙述のはじめから「視力」の比喩が「判断力」とともに登場する。

Je n'ay rien du mien, dequoy contenter mon jugement: j'ay la veüe assez claire et réglée, mais à l'ouvrer elle se trouble: comme j'essaye plus evidamment en la poesie. Je l'aime infiniment, j'y voy assez cler aux ouvrages d'autrui: mais je fay à la verité l'enfant, quand j'y veux mettre la main, je ne me puis souffrir. (II, 17, D. M., pp. 437-438; V. S., p. 635)

他人の作品ははっきりと正しく見えるが、自分で書くとなると霞む目。「小カトーについて」と「セネカとプルタルコス弁護」における「目」の役と「足」の役の両方を、「目」が演じている。このヴァリエーションには、ものを書くという行為が、表現力以前に認識と判断に関わる行為であるというモンテニューの意識¹⁴⁾が表れている。だからこそ「目」の一人二役が生じている。なお、ここでも「視力」には判断力と密接に関わる認識力が認められることを付言しておく。それは《j'y voy assez cler》がテキストCにおいて《je me cognois assez》と書き換えられることにおいていっそう明らかになる。

判断を表す「目」の比喩はさらに展開される。上記の文章に続いてモンテニューは、詩作においてだけはばかなことをしてはならないこと、自分の作品についていかに不満であるかということ述べたのちに、それにひきかえ古代の作品がいかに素晴らしく思えるかを語り始める。

ce que je voy produit par ces riches et grandes ames du temps passé, je le treuve bien loing au dela de l'extreme estendue de mon imagination. Leurs ouvrages ne me satisfont pas seulement et me remplissent, mais ils m'estonnent et transissent d'admiration: je juge tres bien leur beauté, je la voy, mais il m'est impossible de la représenter. (*D. M.*, p. 439; *V. S.*, p. 637)

ここでも彼は「見ている」(《je voy》、《je la voy》)。しかも対象が自分の「想像力が届く極限の範囲のはるか遠くに」あると見てとっている (je le treuve bien loing au dela de l'extreme estendue de mon imagination)。そしてそれに対する「賞賛の念で驚嘆し、ぞくぞく」している (ils m'estonnent et transissent d'admiration)。さらに、その美しさは判断できるが (je juge tres bien leur beauté)、それをまねることが自分には不可能だと言うことを忘れない (il m'est impossible de la représenter)。この不可能の自覚はのちに、賞賛の対象との距離の表現中の《mon imagination》の後に《et souhaict》が書

き加えられるとともに、《impossible de la représenter》が《impossible d'y aspirer》に換えられることによって、さらに「望むべくもない」という自覚に強められる。逆に、この短い一節のなかで二度も使われていた動詞《voir》は、はじめの《ce que je voy produit par》が《les productions de》に換えられることによって一度だけになり、動詞《trouver》のほうは《, je le treuve》が《sont》に換えられる。文体を簡潔化する配慮が著者に働いたと思われる。だが、「見る」ことに関わる動詞の使用回数が3から1に減ったからといって、その効果が減少するというものではない。残された《je la voy》の後に《si non jusques au bout, au moins si avant qu'》という加筆がなされることによって、はじめに提示された「昔の豊かで偉大な魂の作品」の位置する「はるか遠く」へと視線を向けているモンテーニュの目のイメージが、この一節全体に行き渡っていることに変わりはない。そもそも、この精神の所産に関する叙述のはじめから、目の比喩が提示されていたのであるから、なおさらそうである。

だが、精神の所産に関する叙述のはじめに、「視力の良い目」と対をなすのが「よろける足」ではなく「霞む目」であるというヴァリエーションが見られたように、ここにはもうひとつ別のヴァリエーションが見いだされはしないか。モンテーニュは昔の優れた著者の作品と自分の作品との差を《bien loing au dela de l'extreme estendue》と表現している。これは必ずしも「小カトーについて」に見られた「雲泥の差」と同一のものとは断定できない。まず《au dessus de》ではなく《au dela de》が用いられているからであり、さらに《estendue》が続けて用いられているからである。モンテーニュの視線の方向は「雲泥の差」の場合のような垂直方向ではなく、むしろ水平方向ではないだろうか。この精神の所産に関する叙述を章の文脈において読むと、さらにそう考えたくなる。なぜモンテーニュが満足のいかないものしか書けないと語りはじめたかという、この章のタイトルにある「自惚れ」の「第一の要素」である「自分を過大評価すること」に関して「私以上に私を小さく評価することは難しい」と述べたことの第一の理由としてなのである。ところで、「私以上に私を小さく評価することは難しい、なぜなら精神の所産に関して…」と話し始

める前にモンテニユは、「自惚れの第一の要素」について、人間をこきおろす意見に最も愛着を抱くことを述べ、世界の諸現象を人間の力ですべて解明できると自惚れる人々に対する不快感を、「水星の周転円の上にまたがっている人々には歯を抜かれるような思いだ」と語っている (*Ces gens, qui se logent à chevauchons sus l'epicycle de Mercure, il me semble qu'ils m'arrachent les dents.*) (*D. M.*, p. 436; *V. S.*, p. 634)。つまり、賞賛の対象との隔たりが「雲泥の差」であれば、賞賛の対象が、「歯を抜かれるような思い」がするほどの連中と同じように、天空の高みに位置することになる。したがって、この隔たりは水平方向ではないか。

後年の加筆はこの問いを、肯定しかつ否定するものに思われる。《*je la voy*》の後ろに加えられた《*si non jusques au bout, au moins si avant qu'*》という表現は水平方向のイメージを強調しているのではないか。また、「水星の周転円の上にまたがっている人々」は《*Ces gens qui (C) se perchent (A) à chevauchons sur l'epicycle de Mercure, (C) qui voient si avant dans le ciel.*》 (*V. S.*, p. 634) となる。天空を見はるかすイメージが、人間の能力に自惚れる人々に加えられたのである。こうなると、はるかな距離を隔てる賞賛の対象が天空のかなたにあってモンテニユがそれを見ているとすれば、モンテニユ自身が批判する人々とイメージが重なってしまう。この箇所と昔の偉大な作品との隔たりを語る箇所は、モンテニユが1588年以後死ぬまで手元に携えて書き込みを続けたボルドー本では、見開きに見られる¹⁵⁾。

別の加筆は垂直方向につながる語句を用いている。上に引用した一節の直前には、自分の頭のなかにあるものをうまく把握して言葉に表現できないことが語られていたのだが、その書き換えとともに次のような語句が追加された。

《*cette idée mesme n'est que du moyen estage*》 (*V. S.*, p. 637, テキストAとしてあるが実際はC)。「中程度 (の階層)」というこの表現を、ごく一般的な慣用表現とみなすべきか。たしかにこれは『エッセー』に珍しくない表現である。だが、頭のなかに描く考えでさえ中程度なのだから書くものはもっと程度が「低い」という言葉が行間に読めはしないか。したがって、この語句がこの一節の

直前に加筆されることによって地平方向的な距離も垂直方向的な距離に変わる、と考えるべきか。

長々と述べてしまったが、要するにテキストAにおいてもCにおいても曖昧だということである。ここで明らかに提示されているのは「はるかな遠い距離」であり、それを見はるかす目であって、視線の方向性に関しては「小カトーについて」や「セネカとプルタルコス弁護」の場合ほど明確ではなく曖昧である。もちろん、この曖昧さはモンテーニュの比喩の特徴である多義性と不定性の一例だと結論づけることは可能だろう。だが、あれほど明白だった「雲泥の差」に曖昧さが生じていることは注目に値する。ヴァリエーションの可能性をここに垣間見ることができる。それには世界の現象を人間の能力で解明できると自惚れる人間の「水星の周転円にまたがった（そして天空を見はるかす）」イメージが関わっているのではないだろうか。

このように、自分の力では達しえない優れた他者と自己との雲泥の差を見きわめる目の比喩は、必ずしも固定されたものではない。「視力」と「脚力」の対比は、モンテーニュが好んで用いる比喩であるように思われるが、「小カトーについて」でのように判断の対象が行動と呼ぶこともできる行為である場合には「視力」と「脚力」の比喩は明確に対をなすことができるが、それがもっぱら知的能力を用いておこなう行為、ものを書くという行為や、さらには認識・判断に直接関わる行為となると、さきほどのように「霞み目」が「よろける足」の役割を演ずる。また、「雲泥の差」のイメージも単純明快ではなくなるのである。

「子供の教育について」の章でモンテーニュが『エッセ』を書くという行為、つまり判断力の試しという行為に関わる自分自身の能力について語るとき、判断力（「小カトーについて」のなかで《concevoir》と結びついていたが、ここでは《conceptions》と合体している）は、まず「脚力」の弱さを露呈する。

Quant aux facultez natureles qui sont en moy, de quoy c'est icy l'essay,
je les sens flechir sous la charge: mes conceptions et mon jugement ne

marche qu'à tatons, chancelant, bronchant et chopant: et quand je suis allé le plus avant que je puis, si ne me suis je aucunement satisfait.

(I, 26, *D. M.*, p. 187; *V. S.*, p. 146)

たしかに歩いている (marche) には違いないが、足腰の弱さは明白で (flechir)、歩みはいかにもおぼつかなく (à tatons)、危なっかしい (chancelant, bronchant et chopant)。「小カトーについて」の場合 (quand les jambes me faillent) と同様の発想だが、この「脚力の弱さ」の描写はより身体的描写に富んでいる。だが、《à tatons》はすでに「視力の弱さ」を内包しており、これに続く文章はそれを露呈する。

Je voy encore du país au dela: mais d'une veüe trouble, et en nuage, que je ne puis desmeler, (*ibid.*)

英雄的魂を雲のなかまで見分けられた「目」が、たしかに見えることは見えるのだが、雲のなかに霞んで (《une veüe trouble》、《en nuage》)、見分けられないのである。これは「自惚れについて」のなかで頭のなかにあるものを把握して表現できない、あるいは他人の作品はよく見えるが、自分で書くとなると「霞んでくる (elle se trouble)」と言っていたことだ。ここでも同様の発想だが、さらに、視覚を働かせるときの感覚のイメージが膨らんでいる。しかも、ここでもまた、自分の能力不足の自覚から、無力な自分と優れた他者との違いの認識へと論が移っていく。思考の運びとイメージとが同様の展開を見せているのである。

A me reconnoistre au prix de ces gens là si foible et si chetif, si poissant et si endormy, je me fay pitié ou desdain à moy mesmes. Si me gratifie-je de cecy, que mes opinions ont cet honneur de rencontrer aux leurs, et dequoy aussi j'ay au moins cela, qu'un chacun n'a pas, de con-

noistre l'extreme difference d'entre eux et moy: et laisse ce neantmoins courir mes inventions ainsi foibles et basses comme je les ay produites, sans en replastrer et resouder les defaus que cete comparaison m'y a descouvers. (*D. M.*, p. 188; *V. S.*, pp. 146-147)

無力な自分と優れた他者との「はなはだしい違い (l'extreme difference)」は《mes inventions ainsi foibles et basses》とともに「雲泥の差」を連想させる。だが、ここでは、すでに提示された歩行感覚のイメージと、まもなく語られる、『エッセー』中の比喩のなかでも特に表現力に富むことで評価の高い、ある日の読書体験の語りにおける「行路」の感覚¹⁶⁾のイメージによって、全体が、地平上の空間を行く歩行のイメージに支配されている。テキストCではさらに、《et dequoy aussi j'ay au moins》が《et que je vais au moins de loing apres, disant que voire》に書き換えられ、また、この一節の次に《Il faut avoir les reins bien fermes pour entreprendre de marcher front à front avec ces gens là》(*V. S.*, p. 147) という加筆がなされることによって、優れた著者と「横に並んで歩いて行く強い腰」がないから「ずっと後ろからついて行く」イメージが加えられる。明らかに地上的な距離の差として提示されるのである。

はるかに優れた他者と自己との違いの認識が、ここではさらに剽窃あるいは引用の話題に発展する。これによって今の文章中の《sans en replastrer et resouder》とは、自分の拙い文章に他人の見事な文章を混ぜることでごまかしたりはせずに、という意味だったということがわかるのだが、そんなことをしたら逆に自分の文章の拙さが際立ってしまう結果になると言う。この文章の質の違いをモンテーニュは顔の比喩を用いて巧みに表現しているのだが、その実例に出くわしたある日の読書の話がこれに続き、顔の比喩を引き継ぎつつ、すでに提示されていた歩行の比喩が実にイメージ豊かに、「小カトーについて」で提示された「雲泥の差」のイメージを融合しながら展開していく。

Il m'advint l'autre jour de tomber sur un tel passage: j'avois trainé

languissant apres des parolles Françoises, si exangues, si descharnées, et si vuides de matiere et de sens, que ce n'estoient voirement que parolles Françoises. Au bout d'un long et ennuïeus chemin je vins à rencontrer une piece haute, riche et eslevée jusques aux nuës, si j'eusse trouvé la pente douce et la montée un peu alongée, cela eut esté un peu excusable, c'estoit un precipice si droit et si coupé que des six premieres parolles je conneus que je m'envolois en l'autre monde. De là je descouvris la fondriere d'où je venois, si basse et si profonde, que je n'eus onques plus le cœur de m'y ravalier. Si je fardois l'un de mes discours de ces riches peintures, il esclaireroit par trop la bestise des autres. (*D. M.*, pp. 189-190; *V. S.*, p. 147)

「小カトーについて」のなかで偉大な英雄的魂がいた「雲のなか」は「雲までもそそり立った山」になり、モンテーニュが「這って」いた「地上の泥」は「低く深い湿地」になっている。他者と自己の「雲泥」の差が、この他者たちの差の描写において、「高さ」と「低さ」のみならず「雲」と「泥」という対比をも保持しながら、さらにイメージ豊かに広がっている。「小カトーについて」においても「這う (*rampant*)」という運動表現はあった。だが、読書の過程で「雲泥の差」を見出す語り手はより一層運動感覚に富んでいる。しかも時間の経過が組み込まれ、言わば映画的な比喩になっている。もっとも、モンテーニュの比喩は映像そのものというよりもむしろ、その風景のなかを歩いていく人が抱く感覚を描いている。「長く退屈な道」から「雲までもそそり立った山」への移行は「ゆるやかな長い上り坂」どころか「真っ直ぐに切り立った崖」。山の上から見下ろした「もう降りていく気がしない」「いままた低く深い湿地」。それらを見出したときの読者モンテーニュの感覚が、生き生きと『エッセー』の読者に伝えられる。

そればかりではない。「雲までもそそり立った山」は「別世界」ではあるが地上と地続きの山である。地の文から引用文へのいきなりの移行によって「別

世界に飛んだ」モンテーニュは、山地を吹き抜ける突風に吹き飛ばされたのかという想像さえしたくなる。それほど、この一節には地上の雰囲気を読者に感じさせるものがある。「雲泥の差」の明らかな地上化が見られる。この地上化は、自己の力不足を「危なっかしい足」として捉える比喩がすでに内包していた。さらに言えば、優れた他者よりはるかに劣った自己の認識を「視力」と「脚力」の対比によって捉えるモンテーニュの思考のなかにすでに内包されていた。彼がいつものように見出す「雲泥の差」を読書の過程で見出したことを語るといふ機会を得て、それがここに表出したのである。

ここに語られている、モンテーニュがある日読んだ退屈な文章とその著者が剽窃した優れた文章との「雲泥の差」は、モンテーニュにとっては他人事ではない。この一節へと続く一連の文脈と、この一節の最後の一文に明白なとおり、語り手モンテーニュは、他者に引用される優れた文章の書き手の側ではなく、それを引用する稚拙な著者の側に自己を置いている。モンテーニュは他者を見ることによって自己を見ている。「雲泥の差」を呈する他者たちを見る目もまた、彼自身を見る目になっている。次稿では他者同士を対比して捉えるモンテーニュの視線を追うことにする。

注

- 1) 本稿は1992年10月のラプレー・モンテーニュ研究フォーラムにおける発表をもとに、さらに考察を加えたものである。有益なご教示をいただいた会員諸氏に感謝申しあげる。
- 2) *Essais* からの引用は、*Les Essais de Michel de Montaigne*, édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux, préparée par Pierre Villey et rééditée sous la direction et avec une préface de V.-L. Saulnier, 2 vol., Presses Universitaires de France, 3^e éd., 1978 (本稿では V. S. と略記)、および *Les Essais de Michel Eyquem de Montaigne*, reproduction photographique de l'édition originale de 1580, publiée par Daniel Martin, 2 vol., Librairie Slatkine/Librairie Champion, 1976 (*D. M.* と略記) による。*D. M.* からの引用は表記をやや現代語風に改めた。原則として各引用末尾の括弧内に、巻、章、V. S. あるいは *D. M.*、頁、V. S. の場合はテキスト年代別記号 (A, B, C; cf. 本文 p. 3) の順に示すが、巻、章、テキスト年代は、本文あるいは引用文によって示された場合は省略した。なお *D. M.* による引用の場合には、読者の

便宜をはかり V. S. の頁を併記した (テキスト年代別記号は省略)。引用文の下線は引用者によるものである。

- 3) Cf. Floyd Gray, *Le Style de Montaigne*, Librairie Nizet, 1958, pp. 171-173.
- 4) Albert Thibaudet, *Montaigne, textes établis, présentés et annotés* par Floyd Gray, Gallimard, 1963, pp. 540-542.
- 5) Michaël Baraz, *L'Etre et la connaissance selon Montaigne*, Corti, 1968, pp. 75-77.
- 6) ミハイール・バフチーン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、川端香男里訳、せりか書房、1980、pp. 353-358。中世の空間概念と宗教的・道徳的概念の結びつきとダンテの『神曲』に関しては、この他、アーロン・グレイヴィチ『中世文化のカテゴリー』、川端香男里、栗原成郎訳、岩波書店、1972、pp. 101-102。
- 7) A. Thibaudet, *op. cit.*, p. 541.
- 8) M. Baraz, *op. cit.*, p. 73.
- 9) Pierre Villey, *Les Sources et l'évolution des 《Essais》 de Montaigne*, Hachette, 1908, t. I, pp. 286-391, surtout pp. 333-336, 336-391.
- 10) Robert Aulotte, *Montaigne: 《Essais》*, Coll. QUE SAIS-JE?, Presses Universitaires de France, 1988, p. 14.
- 11) たとえば Carol Clark は『エッセー』の比喩研究において「レーモン・スボン弁護」における比喩を、他の比喩の思考への忠実さとは異なる論戦的性格をもつものとして別に扱っている。*The Web of Metaphor: studies in the imagery of Montaigne's 《Essais》*, Lexington, Kentucky, French Forum Publishers, 1978, pp. 146-155.
- 12) 『モンテーニュ』、荒木昭太郎責任編集、「世界の名著」24、中央公論社、1979、p. 183、注(2)。
- 13) *Les Essais de Michel de Montaigne*, reproduction en fac-similé de l'exemplaire de Bordeaux 1588 annoté de la main de Montaigne, par R. Bernoulli, Editions Slatkine, 1987, t. II, Planche 643.
- 14) たとえば次の文章にその意識が明確に表れている：《Mais que nostre disciple soit bien garny de choses, les parolles ne suivront que trop. Il les trainera si elles ne veulent suivre. J'en oy qui s'excusent de ne se pouvoir exprimer et font contenance d'avoir la teste pleine de plusieurs belles choses, mais à faute d'eloquence ne les pouvoir mettre en evidence: c'est une baye. Sçavez vous à mon advis que c'est que cela? Ce sont des ombrages qui leur viennent de quelques conceptions informes, qu'ils ne peuvent desmeler et esclarcir au dedans, ny par consequant produire au dehors. Ils ne s'entendent pas encores eux memes:》(I, 26, *D. M.*, pp. 225-226; V. S., p. 169)
- 15) Bernoulli, *op. cit.*, t. II, Planches 566-567.

16) 荒木昭太郎、前掲書、p. 115、注(5)。

Montaigne, regard vers le haut, regard vers le bas (1)

Mariko OKUMURA

Dans les *Essais* de Montaigne, l'image du regard vers le haut et celle du regard vers le bas sont, de même que les images du haut et du bas, ambivalentes. Le premier correspond souvent à une attitude d'admiration, mais parfois, à une attitude d'effroi. Le deuxième exprime tantôt le dédain, tantôt, à l'inverse, l'admiration. Ces images et les images du haut et du bas sont en relation étroite avec le problème de la connaissance qui préoccupe Montaigne, et avec celui du jugement qu'il «essaie» dans son livre.

Nous traçons d'abord de l'image du regard vers le haut.

Dans les passages sur le jugement des actes des autres, Montaigne admire les grandes âmes, qu'il trouve «dans les nues», «fort loin au-dessus de» lui. Cette admiration toutefois ne le mène pas à vouloir les imiter. Il met l'accent sur l'impossibilité de les «suivre de ses pas», sur «la faiblesse de ses jambes», et se contente de saisir par la «vue» la hauteur admirable. Ainsi, associées aux images de la distance verticale et du regard vers le haut, l'image de la bonne vue et l'image des jambes faibles font contraste. La vue correspond à la capacité de connaissance et de jugement; les jambes, à la capacité d'action. Cette association des images semble chère à Montaigne parce qu'elle se trouve non seulement dans le texte de l'édition de 1580 mais aussi dans l'ajout postérieur à 1588.

Mais elle n'est pas fixée. Quand Montaigne se connaît dans son acte

d'écrire, acte qui exige d'abord la capacité de connaissance et de jugement, sa «vue se trouble», soit à la place de ses «jambes» soit avec ses «jambes». De plus, la grande différence, qui est exprimée explicitement comme distance verticale du ciel à la terre dans quelques passages, est ambiguë (verticale ou horizontale) dans un passage; et dans un autre, bien qu'elle soit verticale, elle devient distance terrestre très imagée. Cette variante dérive de la manière de se connaître par la comparaison avec la hauteur des grandes âmes et par les images de la vue et des jambes qu'emploie Montaigne avec de plus en plus de sensations cénesthésiques.

(à suivre)